

『海国図志』の和解本－アメリカ合衆国に関するものを中心に

文教大学 阿川修三

1 幕末の西洋事情の摂取における『海国図志』

『海国図志』は清末の思想家魏源が、林則徐の『四洲志（Hugh Murray（慕瑞）『The Encyclopedia of Geography（世界地理大全）1834年』を林則徐が梁進徳に漢文に抄訳させたもの）』を藍本とし、それに漢訳洋書（来華宣教師が漢文で著した西学書）や正史などの引用により補った、世界地理書である。

幕末において、西洋事情摂取に貢献したことは、地理学者の鮎沢信太郎、日本思想史研究者の源了圓によって夙に指摘されている。⁽¹⁾

私も、鮎沢の文献的な研究に触発されて、この十年ほど、『海国図志』が日本で、西洋事情摂取について、どのような役割を果たしたかを研究してきた。⁽²⁾

『海国図志』は、日本では、その一部が、和刻本の形で7点翻刻され、併せて、一種の翻訳本と言うべき、和解本も14点刊行されている。ここで言う和刻本とは、原文を翻刻するだけではなく、その上に訓点を付し、欧米の地名・人名・制度に読みをふりがなで付けたものである。一方、和解本とは、原文を和解、即ち和語で解釈したものであり、今日で言う、翻訳とでも言うものであった。

なぜ、西洋事情が、和刻本乃至、漢文訓読体の書籍である和解本を読むことにより摂取されたのかという疑問は当然出てくるが、それは、当時の日本人のレテラシーによる。当時の日本人のほとんどが、英文やオランダ語の文は読めなかったが、漢文や漢文訓読体は得意だったのである。

ここではその和解本の中でも、アメリカ合衆国を対象としたものを対象として、その書物の形態、和解の方法に着目して、その受容の特徴を考えていきたい。

2 アメリカ合衆国を対象とした和刻本、和解本

先ずは、アメリカ合衆国（以下、アメリカと略称）を対象とした和刻本には、名義上は中山傳右衛門であるが、実は当時ペリーとの外交交渉に幕府代表として携わっていた大学頭林復斎（1800～1859）の側近（林家塾頭）として、実際日米修好条約の起草をした河田迪斎が校訂した、和刻本『墨利加洲部』全八巻があり、底本は60巻本である。

アメリカを対象とした和解本は、全部で、次の3種類である。

① 広瀬達『亜米利加総記』【嘉永七（一八五四）年甲寅初夏】、『続亜米利加総記』【嘉永七（一八五四）年甲寅閏（七）月】、『亜米利加総記後編』【安政乙卯（1855年）年初夏（同年正月）】

② 正木篤『墨利加洲沿革総説 総記補輯』【安政二（一八五五）年正月】、『美理哥国総記和

解 上 中 下』【嘉永七年(一八五四年)夏】

③ 皇国隠士『新国図志通解』全四冊【嘉永七年(一八五四年)】

底本となっているのは、60 巻本の巻 39 である

和解本の中で、アメリカを対象としたものが最も多い。刊行時期は最初のペリー来航の嘉永六年(1953 年)直後から、第二回の嘉永七年(1954 年)直後であり、アメリカへの関心が高かった時期に当たる。

①の作者である広瀬達の「亜墨利加総記叙」に

今之夷狄非古之夷狄也。而世人不察、傲然輕視之以不為意、具粗知其情勢者藹然生恐怖之心、而不知所以為備焉。夫能使人審彼之情勢、知可畏而不可怖者是讀書人之任也。顧余非其人耳。然頃者讀清人林則徐海国図志得詳兼攝国建立之本末有所感焉。支兼攝国旧係英夷之属地而一旦不忍其貪虐於耆會議立注申頓為之将帥、遂逐英夷終為獨立不羈之國者七十餘年、……故余就図志中以国字訳弥利堅総記能使世人知彼之情勢可畏不可怖而為之備爾。とある。

当時日本に来航していたペリーの砲艦外交をはじめとする西洋列強の脅威に対抗するには、彼は「顧余非其人耳(私はその任には堪えない)」としながらも、「就図志中以国字訳弥利堅総記能使世人知彼之情勢可畏不可怖而為之備爾(『海国図志』から「弥利堅総記」を日本語に訳して、世の人にアメリカの現状を知り、その力の畏るべきではあるが、海防などの備えをすれば、怖れる必要はないことを知らしめようとした)」のである。ここで言う「世人」とは、当時実際に政治を取り仕切っていた上層の武士のみならず、武士身分としてその最低辺にある「武夫」もこれに含んでいる。

②の作者も、その序に同様のことが記されている。③には序などはないが、その凡例に、

前ニ刊刻スル所ノ海国図志ハ亜墨利加洲ノ古今沿革彼ノ国ノ風俗人情ヲ察スルニハ此書ニ如ハナシ去レトモ漢ト蛮ト字音ニ花地ヲ^{フロ}リ^タ農地ヲ^{ブラ}ド^ル雪際^{スウ}ニ^エ閣^シ龍^ヤ白鉄^{コロン}等^{フユス}ノ如キ大ナル差ヒ多キ故ニ洋学不辨ノ人ハ読ニ煩ハシクテ倦ム因テ国字ヲ以テ之ヲ解スとあり、同様な問題意識を持ち、和解本を作成したことがわかる。

3 和解の方法と書物としての形態

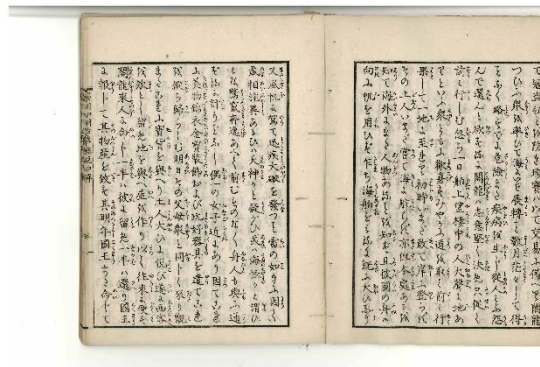
和解の方法については、『亜米利加総記』を対象とした「『海国図志』の和解本『亜墨利加総記』正編、続編、後編について」(『言語と文化』第 33 号 2021)」で指摘しておいたように、「以上、『亜墨利加総記』の和解について、その例に即して検討してきた。廣瀬竹庵は、難解な語、当時一般的でない語は当時においてわかりやすい語に置き換え、また、難解な表現や、当時の一般的読者にとって読みにくい表現については、意識を含めてわかりやすい文に換えている。彼の和解は、所謂漢文読み下し的なものではない。今日で言う翻訳に近いものと思われる。藤森大雅がその序で述べる「通暢平正、於当日事情炳然如觀火。雖武夫讀之、亦通曉」というのは決して単なる仲間褒めではない」のであり、アメリカの地名、人名にはカタカナで読みが付されている。

それは正木篤の『墨利加洲沿革総説 総記補輯』、『美理哥国総記和解 上 中 下』、皇国隠士の『新国図志通解』でもほぼ同様である。勿論、正木の和解本では、例えば、アメリカの独立戦争の記述で長老を意味する「衿耆」の文字の左側には、「としより」、ワシントンがアメリカの軍隊の司令官である「帥」の文字の左側には、「たいしょう」と意味を記し、かなり平易な、リテラシーの能力の高くない人でもわかりやすく、くだけた言い方で和解しているように、三者の和解の方法には幅がある。

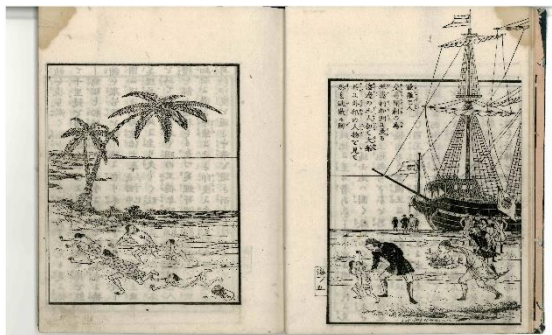
さて、その書物の形態に注目すると、三者それぞれに特徴がある。先ず広瀬達の一連の和解本は本文が漢字にカタカナが混じりで、当時の学術的著作の形であり、今日から見ても読みやすい。皇国隠士の和解本は漢字にひらがなが混じり、そのひらがなには変体仮名もあるが、今日から見て読みにくくはない。更にいくつか挿絵が入っていて、本文の理解に役立つ。正木篤のものは漢字に変体仮名が混じり、今日から見て読みづらい。但し、この書物としての形態は、当時幅広い読者によく読まれた読本のそれに近い。このことは何を意味するのだろうか。



『亜米利加総記』ワシントン総帥



『墨利加洲沿革総説総記補輯和解』



『新国図志通釈』コロンブスアメリカ大陸発見

三者はそれぞれ、序文等で、必ずしもリテラシーが高くない読者、例えば「武夫」を想定し、幅広い読者層を期待しているのである。これら和解本の和解の方法やその書物としての形態には和解本作者の想定、期待の表れではないだろうか。

4 小結

鈴木俊幸によれば、19 世紀、江戸の後期において、経書自学書『經典余師』の流行に現れたように、なんらかの方法で自らの力を引き上げようという努力を行う人々が市場を形成しうるほど拡がりをもったという。(3)

ここに挙げた和解本誕生の背景にはこのような、江戸後期の読書熱という時代背景もかわっている可能性は十分あろう。

注

(1) 鮎澤信太郎「世界地理の部 四 幕末開国期に伝来した唐本世界地理書の翻刻と邦訳」(『鎖国時代日本人の海外知識』p. 130～153)

源了圓「幕末・維新时期における『海国図志』の受容—佐久間象山を中心として」(『日本研究』9 1993)

源了圓「東アジア三国における『海国図志』と横井小楠」(『季刊 日本思想史』60 2002)

(2) 阿川修三『海国図志』と日本(その2)和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について」(『言語と文化』第24号 2011年)

阿川修三「『海国図志』と吉田松陰：幕末における西洋事情の受容について」(『中国文化』第70号 2012)

阿川修三著、王連旺訳「试论海国图志对近代东亚获取海外信息的贡献」(『日本学研究』2019年第2期、2019)

阿川修三「『海国図志』の和解本『亜墨利加総記』正編、続編、後編について」(『言語と文化』第33号 2021)

(3) 鈴木俊幸『江戸の読書熱 平凡社選書 227』(平凡社 2007)p. 10～p. 13